

大川のあゆみ

世界にも類を見ない、
日本一の家具のまち大川。



480年の歴史を誇る大川の家具。その独特のデザイン性や機能性の他に、大川が他の家具生産地と大きく異なる点があります。

大川には、家具や建具をつくる企業が多く存在するだけでなく、製造に関係する製材業、合板販売業、化粧合板製造業、研磨塗装業、ガラス工業、金具販売業、研磨業、家具専門の運送業など、ありとあらゆる分野の事業者が市内に集まっており、ほとんどの部品がすぐに揃います。そしてそれぞれの事業者がしっかりとコミュニケーションを図りながら、様々な分野の知識や経験を集約し、それぞれ専門の視点で研鑽を高め大川の新しい家具を育てているのです。まるでまち全体がひとつの大工場のように機能しています。

大川のような家具生産地は国内だけでなく、世界でも稀だと言えるでしょう。

さらに、大川総桐たんす、村石茂蔵や福山長次郎、志岐惣吉など多数の名工を生み出した大川彫刻、田上嘉作の榎津指物、JR九州の七ツ星列車に選ばれた大川組子、掛川織などの伝統的工芸も脈々と受け継がれています。

伝統と最先端が融合する家具のまち「大川」。大川の歴史と街並を少しだけご紹介いたします。



木製飛行機の主翼の組み立て



【昭和42年】建設中の大川家具工業団地。(三又地区家具工業団地)

戦後「重要木工集団産地」へ、 そして名実共に日本一を目指して。

船大工の技術から指物づくりへと発展していったと言われる大川家具。江戸時代後期に田ノ上嘉作など数々の名工が榎津指物に改良を加え大川木工の礎を築きます。嘉作は、久留米の指物職人に弟子入りし、5年間腕を磨いて榎津に帰ってきます。榎津指物の評判が高くなり、九州中から注文がくるようになりました。

しかし明治の中頃まで、大川で家具問屋をしている家はなく、そのほとんどが注文生産でした。だから、注文がない時は戸棚や机などを作って売り歩いていたそうです。

明治も後半になると技術の分業化が進みました。当時指物業を営むものは551戸にのぼり、この数字は住人の4分の1が木工業に従事していたことを示します。

1909年には三瀨軌道が、1912年には大川鉄道が通るようになり、売り先はますます広がっていきました。

1910年には大川指物同業組合が成立。

1911年には大川工業講習所がつくられ、榎津指物の育成と発展に力をそそぎました。このような努力の結果、榎津指物はこれまでにないほど景気が良くなり、木工業者もさらに増えていきました。

太平洋戦争が始まると大川の木工業は大部分が軍需産業になりました。軍では木工の技術を活かして木で飛行機を作るように命じたそうです。当然、木製ですので飛ばすことが目的ではありません。飛行場に並べて、日本にはまだまだたくさんの飛行機があるのだとアメリカ軍に誇示するためでした。作られた木製飛行機は三井郡の大洗飛行場などに運ばれデコイとして使われ

たそうです。

終戦を迎えると、戦争で多くの人が家具をなくしていたため家庭用家具や公共施設の家具が必要となり、木製品の需要拡大で大川は空前の木工ブームが到来しました。1949年には、国から「重要木工集団産地」の指定を受けました。同年に第1回「大川木工祭」が開催され、大川の木工を大きくアピールしました。

しかし、木工の集団産地として発展した大川でしたが、全国ではほとんど名前が知られていませんでした。大川家具の全国進出は当時の家具づくりに携わる人すべての願いでした。

大川小学校での昔の木工まつり



現在の大川木工まつり



全盛期の榎津指物タンス



書院欄間 高砂(明治中期 作/黒田多吉)



デザイナー河内諒



大流行した引き手なしタンス

全国から賞賛を集めた 大川家具独自の高いデザイン性。



柳川神棚

大川の木工製品が有名になれないのにはデザイン面での工夫が足りないからでした。大川の名を一躍高めたのは、デザイナーの河内諒でした。元熊本工業試験場長の河内諒は、職人たちに新しいデザインについて指導しました。1953年には、大阪で開かれた「筑後物産展」に新しいデザインの大川家具を出品。高い評価を受け京都や大阪との取引が始まりました。1955年大阪で開かれた西日本物産展で、河内諒自身がデザインし、光木工が制作した金具なし、引き手なし、チー

ク材ラッカー仕上げの和箆笥が、最高賞を受賞。洗練されたデザインで日本中の人気を集めました。同年、東京の白木屋デパートで開かれた「第1回全国優良家具展」に大川から5品目の家具を出展、見事入賞し、デザイン性の高さを全国に示すことができました。これをきっかけに、大川家具は近代的なセンスにあふれた「大川調」の家具として一躍有名になり、全国各地より注文が相次ぎ、販路を拡大していきました。

昭和30年代に入ると機械化が進み、多くの家具を短時間で作ることができるようになりました。それまで天日に頼っていた木材の乾燥も機械で行ったり、木工道具から機械へ変わり万能機から専用機へと生産体制が整ってきました。

しかしこれまでの小さな工場では機械化に対応しきれないことから1967年11月に大川家具工業団地がつくられ、その後大川建具工業団地、大川家具木室団地、大川製材団地もつくられ工場の集団化が進められました。

現在では、伝統を受け継ぎながら現代のライフスタイルに合った商品開発に取り組んでいます。そのひとつが、大川の異業種の職人やデザイナーとコラボレーションして誕生したオリジナルブランド「SAJICA(サジカ)」です。

このほか、加齢により身体機能の変化に対応し、自立をサポートする福祉家具の開発など、人に、環境

に優しい快適なインテリア空間の創造に取り組んでいます。

このようにして、大川市は、日本一の家具のまち、そして住空間を創造するインテリアのまちへと発展し続けています。



大川総綱タンス

大川組子

